THE IMPORTANCE OF BEING EARNEST, SALOME AND AN IDEAL HUSBAND

BY

TSUNEO AOKI

PROFESSOR OF ENGLISH IN THE TOKYO HIGHER NORMAL SCHOOL

TOKYO

KENKYUSHA

1925

KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書

大正十四年二月十五日印刷　大正十四年二月二十日發行

主幹者　岡倉由三郎

主幹者　市河三喜

發行兼印刷者　小酒井五一郎

東京市麹町區富士見町六丁目七番地

印刷所　研究社印刷所

東京市麹町區飯田町六丁目一番地

發行所　研究社

東京市麹町區富士見町六丁目七番地

電話四谷二九五五番

振替口座東京二八六〇一番

非賣品

(芝赤羽橋　新榮社製本)

小　序

本書の Notes がこの形になるまでには、岡倉市河兩主幹のお世話になつたことが一通りではない。玆に謹んで兩先生に感謝の意を捧げる。

本書の Introduction は、同僚であり先輩である渡邊半次郎氏の手を煩はして成つたもの。氏は嘗て東京帝國大學で、大塚保治博士の講筵に列り、Oscar Wilde に關する同博士の說を聽いて、大に得る所があられたことのこと。故になまじ自分が禿筆を弄するよりはと、主幹にも相談の上、執筆を依賴したところ、快く承諾された。同氏にも衷心から謝意を表する。

大正十三年十月一日　　青木常雄

INTRODUCTION

I. Oscar Wilde の生涯と著作

(1) はしがき

耽美家、唯美主義者、所謂 æsthetes は世に多しと雖も東西に亙り古今を通じて最良の代表者は蓋英國の Oscar Wilde を以てその首位に推す。古く羅馬に Petronius (Sienkiewicz の *Quo Vadis* 參照) あり、近く獨逸に Goethe あり、佛蘭西には Baudelaire, 米國には Poe と云ふやうに、數の多きと同時に種類にも種々あるが、併し彼等の作品には總べて beauty の外に宗教、道德、哲學等複雜多樣な傾向をも含んで各方面に亙つた活動があるから、純然たる æstheticism (藝術唯一主義) の一點張りで終始してゐる者は一人も無い。道德的、宗教的、實際的、實世間的の諸方面は一切犧牲にして美的方面だけを發揮せる點に於て Wilde は best representative である。彼は天賦の素質が元來耽美的 (æsthetic) であるのみならず、又自分の長所、使命が æstheticism の發揮にありと自覺して之に努力し、殊に藝術に於けるよりも實生活に於て一層多く beauty を realize せんと努めた。æstheticism を實人生に發揮するのが主眼で、それでなほ餘暇があれば藝術にも實現すると云ふ態度である。Wilde が牢を出て佛蘭西に渡つた時、親友 André Gide に語つた言葉に "Would you like to know the great drama of my life? It is that I have put all my genius into my life; I have put only my talent into my art." と云つた。極めて徹底的にして純一無雜な生粹の耽美家 Wilde は æstheticism を以てその生涯を貫徹し、personality そのものが全く唯美主義の發現である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

凡そ人の作品にはその作者の人格が表現され反映される。佛蘭西の警句に「藝術は或る氣分を通して見たる自然の一隅である」("Art is a bit of nature seen through a temperament") とある。だから作品と作家の personality とを連結して批評することは近代批評の第一方法である。孰れの評傳にも "Life and Works" と云つてゐる。殊に Wilde は普通の場合と異なり、藝術が人生を模倣するに非ずして却つて life が art を imitate すると主張して藝術をそのまゝ實人生に生活し實現しようと求め、美の發揮には人生を著述よりも重要なものと認めて著作は單に人生の副產物に過ぎずとなした作家、さう云ふ作家の場合に於ては著述を生涯と結びつけて恰も畫家の自畫像を見るが如くに相關的に見ることが理解上至當なるのみならず又必要である。傳記上の事實を離れて彼の作品を鑑賞することは頗困難である。

(2) 生ひ立ちより牛津卒業まで (1854–78)

Oscar Fingall O'Flahertie Wills Wilde と云ふ長い名前は青年期及び壯年期を通じて御本人の至極得意としたところ、彼は 1854 年十月、愛蘭の首都 Dublin に生れた。ダブリンで相當名のある眼科及び耳科の專門醫であつた父 Sir William Wilde (1815–76) は 1864 年に Knight に列せられ、一方また考古學にも秀でてゐた。次男 Oscar と同じく "extraordinary mixture of intellectuality and animalism" (Sherard) を素質の中に持つてゐた。Oscar が二十二歲の時 (Oxford 在學中) 六十一歲で世を去つた。母 Jane Francesca Elgee (1826–96) は名門の出で、親族にも高名の士多く、かの *Melmoth the Wanderer* (1820) の著者として世に聞えた愛蘭小說家 Reverend Charles Robert Maturin (1782–1824) の如きも Jane の曾祖父である。Jane 自身も閨秀作家で二十一二歲の頃から 'Speranza' と云ふ雅號を以て詩や散文を週刊雜誌に寄せて名

既に高く、愛蘭の獨立運動を歌つた詩を詠み又之を煽動する論文や書翰を投稿したりした。佛蘭西語、獨逸語は言ふに及はず希臘語、羅典語にも通曉した。1851 年 William と結婚したが、その家庭は「ダブリンのお廣間」(" the Salon of the Capital ") と呼はれ、數多の名流が集合する所であつた。Jane の社交的なる傾向、浪漫的、空想的なる特性、理想にあこがれ、傳說的或は歷史上の古英雄や女丈夫の行動を好み、凡俗な事務、日常の瑣事を厭ふ性質など、皆 Oscar に遺傳してゐる。

Oscar は三人兄弟で、兄を William, 妹を Isola と云つた。William は倫敦で雜誌記者となり 1899 年 Oscar より一年先きに他界した。妹が子供の時夭折した其記念の詩が例の " Requiescat " である。また年若い Oscar も愛妹の永眠によつて死の神の風丰を眼のあたり見せつけられ、

" All her bright golden hair
Tarnished with rust,
She that was young and fair
Fallen to dust "

と思ふにつけ、無常の風をしみじみと感じたのである。Wilde の初期の詩は大抵さうであるが、この哀歌もまた先人の模倣である。併し中々綺麗で Hood* から奪胎したと切り込んで言ふのは罪なやうな氣がする程である。

十一歲 (1864) の時 Enniskillen なる Portora Royal School に入學。成績は本 (books) はよく出來たが數學は全く手の付けやうも無い不出來、品行は良好、生徒間には不人望であつた。一つには性質が無口の方で、仲間から離れて獨り勉强し、一緒に遊戲をし

* " Take her up tenderly,
Lift her with care;
Fashioned so slenderly,
Young, and so fair! "

なかつたからである。1871 年には奬學金を得て Dublin の Trinity College に入つた。此處でも成績よく、73 年には Queen's Scholarship を受け、74 年には希臘語秀逸の賞 Berkeley Gold Medal を得、同年品行方正、學術優等を以て卒業、直ちに Oxford 大學の Magdalen ['mɔ:dlin] College に入り、やはり優良の成績を續けて 1878 年 B. A. となつた。

Oxford に入學したことは、後に社會が彼を獄に投じたことと共に、Oscar の生涯中で二大廻轉期の一つであると自ら *De Profundis* の中に云つてゐる。この學府に於て彼は Ruskin 及び Pater の講演を聽き著書を讀み又個人的にも相知るに至つた。Wilde が æsthetic movement に參加するに至つたのも、また "The Soul of Man under Socialism" と云ふ論文を書いたのも Ruskin の感化である。Ruskin は勞働の福音を鼓吹し、實例を以て中流社會に勞働を教示し、一群の學生を集めて所謂 Ruskin's wheel-barrow を挽かしめ、以て道路を開掘する實驗に從事せしめた。Wilde も之に參加した。Pater に對しても當代第一流の散文作家として敬服した。その他 Tennyson, Rossetti, Swinburne などをも推重したが、Ruskin は唯美運動の有力なる頭目、Pater もその主要なる指導者で、後に Wilde がこの運動を一人で背負つて立つに至つたのは素より Wilde 自身の素質の中に固有の æsthetic tendency を藏して居つたことに因るのであらうが、Ruskin 及び Pater との接觸がその萠芽を開展させる外的誘因となつたことは疑ひない。

Oxford 在學中に、Ruskin や Pater よりも一層大なる影響を Wilde に與へたものは南歐旅行である。彼は Portora 在校中から休暇には母と共に佛蘭西に度々行つた。佛蘭西語に熟達し佛蘭西文に堪能となり、社交的な、都會文化的な佛蘭西文明の影響を受けて美的方面の發展を助長したのもさうした因緣があるのである。Oxford に來てから 1877 年に高名なる希臘學者 John Pentland

Mahaffy に從つて伊太利に旅行し序に希臘にも行つて古典藝術に直面する——得難い——機會を得た。apostle of beauty として一生を美の宣傳に捧げようと彼に決心させたのは實にこの希臘旅行である。實際の古典美術品と初めて目のあたり面接するに及んで今や心眼一朝にして覺醒し自覺的、自意識的に美の本尊を崇拜するに至つたのである。この旅行から生まれた Wilde の詩の主なるものは皆詩集に載錄してある。"Ravenna" と云ふ詩は 1878 年六月 Newdigate Prize Poem に當選して Oxford の Sheldonian Theatre で朗讀されたものである。

Wilde の、假面を裝ひ、利いた風な振りをする癖、所謂 posing, posturing は Oxford 時代から始まつた。Wilde は詩文には理解があつたが、一般の美術趣味は鈍感で、繪畫も音樂も室內裝飾も本當には一向解からなかつたさうであるが、會合の席上などでは人と調子を合せる爲めに一廉解かつてるやうな振りをする、かうした場合が度重なるに至れば後々には人々から趣味の人であるやうに期待されるから、益々識つた振りをする實際の必要も生じ、下地が既に posing を好むその素質と相結んで愈々益々この氣取り屋の癖が昂進し、果ては遂に牢獄に繫がれるまでに昂じたのである。

(3) 倫敦の生活より米國巡廻講演まで (1878–83)

Wilde は 1878 年 Oxford 卒業の後、倫敦に行き藝術批評家、美學の教授と名乘つて全市を征服し名聲を贏ち得んことを目指した。專ら世の注意を引かんとして先づ æsthetic costume を纏ひ、やがて當時、英國に勃興しつつあつた æsthetic movement の champion となり、唯美的人生觀を解說し民衆化し普及せしめて 1880 年代には益々之を隆盛となした。抑もこの唯美運動たるや beauty を人生及び文化に取つて最も重要なりとして之を宗教や道德の上位におき、文學、美術及び實際生活に美を發揮するのを主眼とするも

の、英國に於ける唯美運動の有力なる指導者は Ruskin 及び Rossetti で、その外部に現はれた著しい事件は十九世紀後半の「ラファエル前派運動」である。初め 1848 年に王立美術院の二十歳前後の美術學生等が Pre-Raphaelite Brotherhood (略稱 P. R. B.) を組織して從前の描寫法が傳統的で技巧の美を偏重したのに反抗し自然や眞實を主要なりとし、形式を美化した Raphael より以前に溯つて十五世紀の畫家——この方が眞率であるから——に倣はうと標榜した。その後或は脱會する者、或は新に入會する者あつて會員の組織にも變遷を見、各個人の主張にも小異はあるが、その一致點を要約すれば、伊太利文化の主調たる form of beauty と英國文化の特徴たる宗教心との結合、或は古典主義と浪漫主義との融合、或は Christianity と Paganism との連結、或は archaism と modernity との統合、つまり感覺的要素と精神的要素との親密なる統一融和にあつたと云つて可からう。先づ P. R. B. の繪畫を見ると Rossetti, Burne-Jones 等の繪は靈肉の一致を巧に表現し、構想に於ては心靈的、理想的で、技巧、細部の取扱に於ては寫實的、具體的、簡素な所がよく融合してゐる。次に裝飾美術の方面では Ruskin の Socialism に從ひ、多數の民衆を相手にするには純正美術では效力が少いから補助藝術に依らうと云ふので、William Morris, Ruskin 等が集つて工藝美術會社を組織し、織物、縫物、硝子器具、室内裝飾品等を製作した。最後に文學の方面では Rossetti が先達で、外に Pater や Swinburne 等が æstheticism を唱道してゐた。

かやうに æstheticism の盛んになつた頃、丁度 Wilde が倫敦へ出て來て頻りに假裝を行ひ æsthetic costume を纏つた。天鵞絨の上衣、海老茶色の別珍製半づぼん、黑絹の靴足袋、そして襯衣の襟を折り返し、大きなネクタイは、當時、唯美派がその室内裝飾に用ひた色に倣つて、綠色にし、髮は長く貯へ、帽子は biretta (四角な僧

帽）を被り、手には百合の花と向日葵とを持つて市街を練り歩いたり宴席へ出たりした。かうした異樣な風をするに至つた動機は種々あるであらう。これまで自分の詩集の出版を引受けてくれる書肆が無かつたから世人の好奇心に訴へて自分の名を廣告する爲めであると評する人もある。或はまた社交界に入りたいと云ふ豫ての切實な希望を滿さん爲めの自己廣告で同時にあつたかも知れぬ。併しまた Wilde の性格そのものの中に自我主義の色彩强く、他人と違つたことをするのを好む素質があつた爲めに異樣な風をすることと自身がそれだけで面白いと思つたことも動機の一つに數へ得ると思ふ。一つには æsthetic costume 自身が美的に價値ありと思つたのかも知れぬ。近代の服裝は無風流だと批難した Wilde 自身の言葉は强ちに眞摯を缺くとも斷定し得まい。

玆に於て Morris, Rossetti, Ruskin 等の廣めた唯美運動は Wilde に依つて益々有名となり 1880 年から 83 年までの間は Wilde と æstheticism とが毎週 *Punch* 誌の caricature に依つて槍玉にあげられ世人の注意を引いた。かくて Wilde の名は æstheticism と同一視され æsthetic costume の目的は達成され、倫敦の社交界に這入りたいと云ふ豫ねての願望も叶つて、設令それは縉紳華冑の眞の society では無かつたにせよ、とにかく華の都で中流の社交界に入り流行兒 (lions) の一人となつた。詩集出版の計畫も成功し 1881 年に初版を出し間もなく五版を重ねた。

1881 年十二月二十四日 Wilde は米國に向つて巡廻講演の旅に上つた。蓋當時、英國で隆盛を極めてゐる æsthetic movement を知らんとする好奇心が米國人にあり、一方また之を双肩に擔つてゐる Oscar Wilde——今や詩集の著者である——は何ういふ人だらうと云ふ好奇心も手傳つて一團の米國人が資金を集めて Wilde に講演を頼んだのである。Wilde は豫て *Vera, or the Nihilists* と云ふ脚本を書き、英國では上演が出來ないので、米國なら興行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

し得るやも知れぬと思つて米國行を承諾した。ところが實は騙されたのであつた。これより前 Gilbert の本文に Sullivan が音樂を付けた comic opera で *Patience* (1881) と云ふのがある。英國の唯美主義を滑稽に諷刺した parody (戯擬詩劇) で、これが倫敦の Savoy 座に掛かつて大變な人氣を博し、次で米國でも興行されたが、元來 *Patience* は æstheticism の caricature であるのに、英國でこそ P. R. B. の作品や Wilde の服裝を實際に目擊したりして熟知してゐるから travesty (改作狂詩) の humour も生じて來るが、æstheticism に面接してゐない米國人に取つては何處をどう當て擦つたものやら一向見當がつかない。そこで Savoy 座主 D'Oyly Carte が Wilde を米國へ引張り出さうとたくらんだその術數に Wilde が乘つた譯である。まづ New York で講演したのが大成功で、初めの取極めは巡廻講演でなく唯た New York 市で一二回やる約束——滯在も二三個月のつもり——であつたが、New York で馬鹿に人氣があつた爲め、該地 lecture agents の一人が Wilde を伴れて Canada までも地方講演をやつて廻つた。これら講演の大略は Wilde 全集中にある *Essays and Lectures* の一卷に收めてある。"The English Renaissance of Art", "House Decoration", "Art and the Handicraftsman" 等を反復、講演したのである。世間では唯美運動は文學よりも美術殊に工藝の方面で却つて有名であつたので。米國の巡廻講演は一個年計り續き、到る處で滑稽なことを演ずるはめに事情に依つて餘儀なくされ、例の *Vera* の興行は畫策したけれども意の如くならずじまひであつた。但し、多少の金圓を收得し又常識の修養にも大に資する所はあつた。

(4) 努力、奮鬪の時代 (1883-91)

米國を去るや倫敦に暫く足を留めて後 Paris に行き 1883 年の春から夏まで滯在した。米國から歸つて以來は風變りな交際や異樣

な服裝は廢止し、Paris にては該地流行の一般の衣服を纏つたが、但毛皮の外套を用ひた爲めに人の感觸を害したと云ふ。頭髮は Louvre 博物館なる Nero の胸像の短髮を眞似て短く切り自ら之を Neronian coiffure と名づけた。立派な旅館 (Hôtel Voltaire) に陣取り、自分の詩集に自署して文士、美術家に配布し、交際を求めて名流の家に出入した。Victor Hugo, Goncourts, Daudet, 殊に P. Bourget とは親交厚く、Sarah Bernhardt にも初めのうちは尊敬された。Balzac の藝才は勿論、また彼が藝術に熱誠で努力を惜しまず力作した敬虔な態度に私淑し、懶惰な自分も之にあやかりたいと念じ、Balzac の夜中執筆する癖、僧侶の頭巾を頂き、白い night gown を着る習、青い玉の付いた象牙のステッキなど一々眞似て自分も勤勉に著作に從事した。かうして書き上げたのが *The Duchess of Padua* と云ふ脚本、倫敦の女優 Mary Anderson に主役を當てゝ書いたので演出を頼んだら、讀んでは面白いけれど舞臺に掛けるには適しないと云つて斷つて來た。1891 年に New York で上場した時も失敗し、1904 年 Hamburg で興行した時には役者の拙劣な爲めに又成功しなかつた。出版したのは 1908 年である。詩の方では "The Sphinx" と "The Harlot's House" とに筆を染めた。

半年計りは金があつて氣樂に暮してゐたが資金が缺乏した爲め夏の終りに London に歸つて生活費を稼ぐことゝなつた。米國の講演周旋業者の倫敦支店からの交渉で英國の地方巡廻講演を頼まれ、Piccadilly 及び各地方の都邑を廻つて "The House Beautiful" に就き講演したが大失敗に終つた。聽衆は æsthete を見ようとする好奇心で集つたものであるのに Wilde は今や æsthetic costume を廢止して居り、また演說は眞面目な、學術的なものであつた爲め不成功であつた。この巡廻講演とは關係なく 1883 年 Royal Academy でも講演をした。Wilde は豫ねてから畫家 Whistler の

知遇を受け米國から歸つてからは益々親しくなり café で飲食を共にしたりする間柄となつて、この講演の時にも Whistler が Wilde の爲めに演說の輪廓を詳細に書き記るし警句までも挿入して渡し、Wilde はこの大部分を用ひて講演も大成功に終つた。ところがその後二人の間に、藝術家と批評家との間に有り勝ちな仲違ひを生じ、Whistler は Wilde の講演の內容を素破拔き、藝術の藝の字も分らぬ者が藝術について利いた風なことを喋々するのは片腹痛いと批難した。二人は手紙で論爭を戰はした。その顚末は Whistler の *Ten O'Clock* 及び *The Gentle Art of Making Enemies* に明かである。

Wilde の窮乏した生活は 1884 年五月結婚に依つて救はれた。新婦Constance Mary Lloyd は著名な特許辯護士の娘である。結婚當時は普通の生活であつたが、妻の祖父が死んでその遺產を受けるに及んで裕福になつた。そのうち子供が二人——共に男兒で Cyril (1885) と Vivian (1886)——となつて費用も嵩み、生活の爲めに奮鬪せざるを得なくなつた。元來懶惰な性分であつたが stern realities of life の爲めとて是非も無い。新聞や雜誌に新刊紹介や文藝批評などを寄せ——Whistler 事件後は美術批評家としての價値なしと世間から認定されたから講演は今や思ひもよらない——1887年から 89 年までは *The Woman's World* と云ふ雜誌の編輯を依囑された。1883 年から 91 年までの間に書いた著作の中、書物となつてゐる主なるものを下に揭げる。

(i) *The Happy Prince and Other Tales* (1888). お伽噺五篇 "The Happy Prince", "The Nightingale and the Rose", "The Selfish Giant", "The Devoted Friend", "The Remarkable Rocket" を含む。

(ii) *The House of Pomegranates* (1891). お伽噺四篇 "The Young King", "The Birthday of the Infanta", "The Fisherman

and his Soul", "The Star-Child" を含む。

(iii) *Lord Arthur Savile's Crime and Other Stories* (1891). 短篇小說四篇（孰れも 1887 年に發表したもの）"Lord Arthur Savile's ['sævilz] Crime", "The Canterville Ghost" "The Sphinx without a Secret", "The Model Millionaire", 之に、小說の體裁を假りて Shakespeare の Sonnets に關し空想を廻らして書いた論文 "The Portrait of Mr. W. H." (188) 年 *Blackwood's Magazine* 掲載）を加へて一册に綴合せたもの。

(iv) *The Picture of Dorian Gray* (1891). 1890 年米國の月刊雜誌 *Lippincott's Magazine* に出したとき、道德に害ある小說だとの批難があり、Wilde はその辯解を警句的に書いて *Fortnightly Review* に載せたが、後之を Preface とし、本文には更に六章を加へて單行本としたものである。

(v) *The Soul of Man under Socialism* (1891). *Fortnightly Review* に載せ、後 (1904) に單行本とした。

(vi) *Intentions* (1891). "The Decay of Lying" (1889 年 *Nineteenth Century* 掲載), "Pen, Pencil, and Poison" (1889 年 *Fortnightly Review* 所載), "The Critic as Artist" (1890 年 *Nineteenth Century* 掲載), "The Truth of Masks" (1885 年 *Nineteenth Century* に發表）を一册に纏めた論文集。

(5) Wilde の全盛時代 (1892–95)

(i) *Lady Windermere's Fan.* 1892 年二月二十日 George Alexander に依つて St. James's Theatre に上演。一躍大成功。

(ii) *A Woman of No Importance.* 1893 年四月十九日 Herbert Beerbohm Tree に依つて Haymarket Theatre に上場、更に一層の好評を得た。

(iii) *An Ideal Husband.* 1895 年正月三日、やはり同座に Tree

が演出し、大當りであつた。

(iv) *The Importance of Being Earnest.* 1895 年二月十四日、George Alexander の出し物で、St. James's 座に興行、前三者にも優つて更に大成功。これまで Wilde の作を惡しざまに言つて居つた批評家らも是では全然兜をぬいた。これら四篇の social comedies (世話物) の外に romantic plays (時代物) と呼はれるもの三篇卽ち *Salome* (1891) と斷片二篇 *La Sainte Courtisane* 及び *A Florentine Tragedy* がある。

一體芝居は民衆的の藝術で、手取り早く直接の——丁度、會話の際、面と向つて賞められる樣な——賞讃、喝采を廣い社會から呼出し易く、殊に一興行毎に royalty が這入るから今日でも西洋では——日本でも何處でも——一番利得の多い、派手な藝術である。Wilde はこれら世話物に大當りを得て一躍、第一流の劇作者となり、盛名世に鳴り衆望天下に普く、1894 年には年收八萬圓に上り福祿竝び備はり成功と名聲との極點に達した。"He was a monarch in his own sphere, rich, famous, popular; looked up to as a master by the younger generation, courted by the fashionable world, loaded with commissions by theatrical managers, interviewed, paragraphed and pictured by the Press, and envied by the envious and the incompetent. All the flattery and luxury of success were his, and his luxuriant and applause-loving nature appeared to revel in the glittering surf of conquest like a joyous bather in a sunny sea." と H. Jackson は *The Eighteen Nineties* に叙してゐる。元來飲食往くとして可ならざるなく、酒も煙草も好きであつた Wilde は早速これまで金の無いため意の如くならなかつた奢侈、遊蕩に耽溺し、元々花氣違ひであつた彼は今や種々の珍奇にして高價な花を buttonhole に飾り、前からも好きであつた馬車に毎日乘り廻はして倫敦の cabmen の間に最も知名な華客となり、第一流の restaurant

に出入し、自分の機嫌を取る人には金を遣り、友人にも金目の贈物を與へた。同時に體は益々肥滿し顏もむくみ、斯くて Wilde は肉體的にも道德的にも變つて行つた。さうして 1886 年に初めて實驗した Greek vice は 89 年、まだ收入の多くない頃、既に習慣に成熟し 95 年遂に彼を沒落せしめるに至つた。

(6) 美少年事件裁判より終焉まで (1895–1900)

1895 年三月一日——この年正月には *An Ideal Husband*, 二月には *The Importance of Being Earnest* を上演した——Wilde は Marquis of Queensberry を名譽毀損罪で訴へたところが、それが藪蛇となつて却つてあべこべに自分が獄に投ぜられるに至つた。Queensberry 侯は六十歲前後の老人、Wilde は時に四十二歲、事は侯の三男 Lord Alfred Bruce Douglas (當時二十五歲) が Wilde と親交あり、父はその間を割かんとして果さず、遂に侮辱的の文句を列ねた名刺を Wilde に與へたに始まる。抑も Alfred Douglas は Wilde の母校 Oxford の Magdalen College に在學中 1892 年、二學年 (二十二歲) の時 Lionel Johnson の紹介で Wilde と相知るに至り、その後、先輩として彼を尊敬して居つた。Wilde の方でも身分ある Alfred と親しむことは自分が社交界に這入る手づるとして都合が好いので大に小公子の機嫌を取つた。かくして二人は遂に莫逆の友として Wilde の行く所へは必ず Alfred も行き、Alfred の居る所へは必ず Wilde も顏を見せると云ふ具合、侯爵が三男の身の上を心配して兩者を離間しようとすれはするほど却つて彼等は愈々離れ難い間柄となつた。

一體侯爵は有名な亂暴者且つ pugilist で家庭も揉め、借金も多く、丁度、兩人の知合つた頃から侯夫妻は離緣 (separation) となり、Alfred は母に味方した。父が離間策を講ずれは Alfred は離緣の爲めに父に反對してゐる際でもあり、その命に從はず、父が送

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook